飯田二反田遺跡

はんだ　にたんだ

一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う発掘調査概報Ⅰ

1989

大分県教育委員会

飯田二反田遺跡１号住居跡（東より）

例　　言

1.　本書は、昭和63年度に発掘調査を実施した一般国道10号宇佐別府道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告である。

2.　発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3.　調査組織は次の通りである。

調査委員　賀川　光夫（別府大学学長）
小田富士雄（福岡大学教授）
橘　　昌信（別府大学教授）
家根　祥多（立命館大学助教授）
田中　良之（九州大学助手）
小代　基雍（大分県教育庁管理部文化課長）
後藤　宗俊（同課長補佐）

調査主任　渋谷忠章（県文化課埋蔵文化財第２係長）

調 査 員　高橋　徹（県文化課主査）、宮内克己（同主任）、西　哲弘（同主任）、小林昭彦（同主任）、友岡信彦（同主事）、松本康弘（同主事）、吉田　寛（同主事）、永松みゆき（同嘱託）、姫野和子（同嘱託）、吉武牧子（同嘱託）

調査補助員　宮下貴浩（別府大学学生）

上記の他、佐藤興治（大分市歴史資料館館長）、玉永光洋（同学芸係長）、後藤一重（県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員）氏などの視察と御助言を頂いた。

4.　本書の執筆は、松本・永松が分担し、編集は渋谷・松本が行った。

目　　次

Ⅰ．はじめに …… 1
(1)　調査の経過 …… 1
(2)　昭和63年度調査遺跡の概要 …… 1
Ⅱ．飯田二反田遺跡 …… 3
(1)　遺跡の位置と環境 …… 3
(2)　調査の概要 …… 4
Ⅲ．ま　と　め …… 18

Ⅰ　は　じ　め　に

(1)　調査の経過

宇佐別府道路は、一般国道10号線のバイパスとして計画された北大道路のうちの一つで、宇佐市から日出町に渡っている。そのうち建設省施行区間は、院内町香下から安心院佐田に至る全長8.4㎞である。路線内の埋蔵文化財の取扱いは、昭和61年度に分布調査を行ない、8か所を埋蔵文化財包蔵地と判断し、昭和62年12月以降試掘調査を行なった。

第1図　宇佐・別府道路路線図

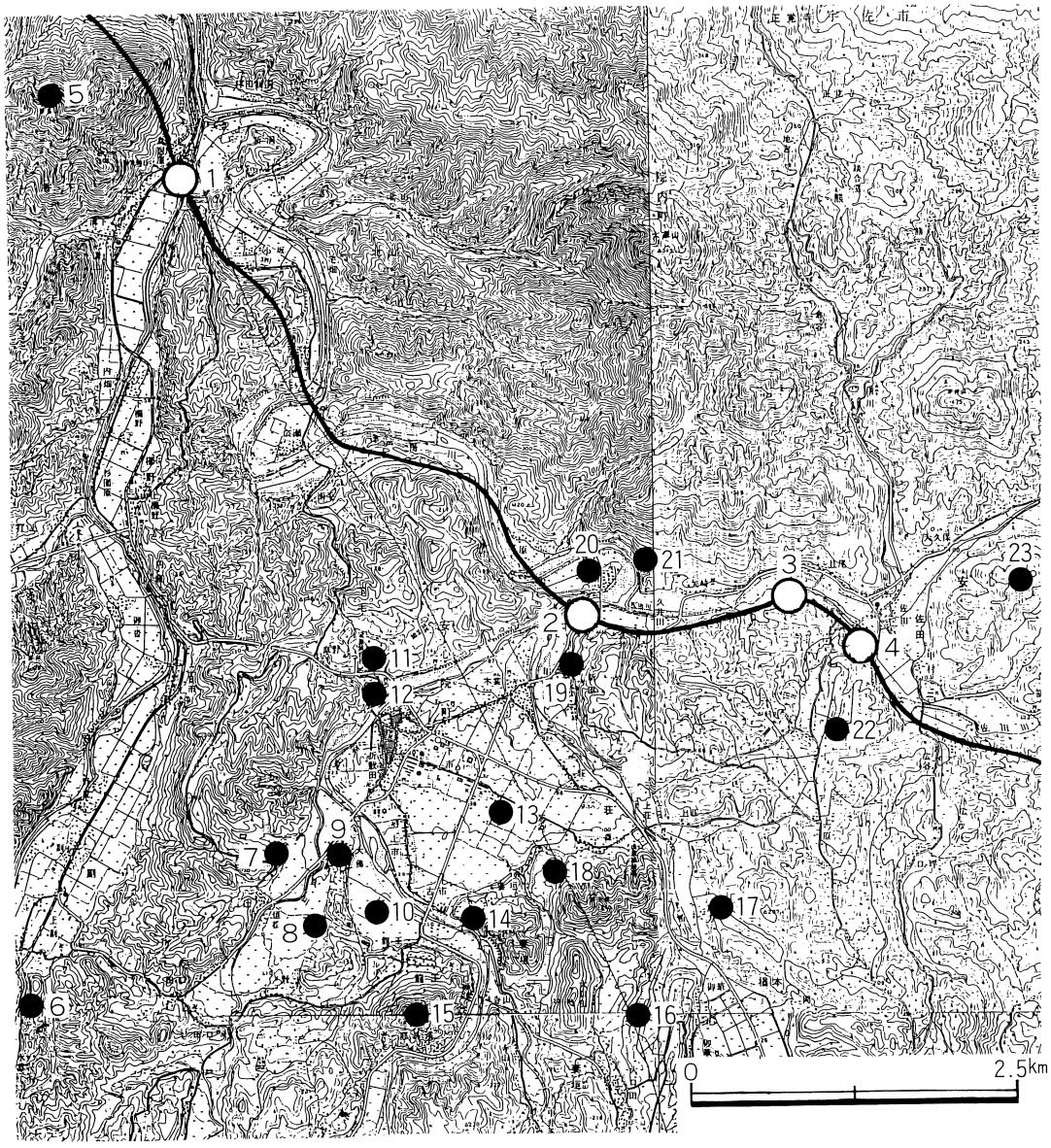
本年度は、両川遺跡（№1）、飯田二反田遺跡（№6）、且尾遺跡（№7）、上ノ原遺跡（№8）の試掘・本調査を行なった。このうち飯田二反田遺跡は、昭和52年度に圃場整備事業が行なわれており、遺構の遺存は強く期待されなかったが、県内では類例の少ない縄文時代後期の集落跡を確認した。しかも遺物も多量に出土し、当地域の縄文時代後期の集落・土器研究の上から注目される遺跡となった。

(2)　昭和63年度調査遺跡の概要

両川遺跡は、院内町香下に所在し、駅館川の支流津房川の段丘上に立地する。遺構は近世の溝・土坑・ピット群を検出した。その他縄文時代前期の轟B式、縄文時代晩期の浅鉢が出土しており、周辺に関連する遺構があると思われる。

且尾遺跡・上ノ原遺跡は、安心院町大字且尾に所在し、中広銅矛7口を出土した上ノ原台地の北端部に位置し、佐田川（津房川）に向かって落ちていく斜面上に立地する。且尾遺跡は、約3,800㎡の調査対象地の試掘を行なったが、遺構は確認できず、数点の土器・石器片を得るにとどまった。上ノ原遺跡は、調査対象地の1/4の2,000㎡の試掘調査を行なったが、遺構は存在しなかった。残り3/4は次年度に継続して調査する予定である。

飯田二反田遺跡では、縄文時代後期の住居跡6軒、集石遺構を確認した。更に溝4条、掘立柱建物1棟を検出した。出土土器により7世紀初頭～前半に比定される。



第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（本図は国土地理院「下市」・「立石」（２万５千分の１）地形図を使用した）

1．両川遺跡
5．妙見城跡
9．鬼塚古墳
13．安心院盆地条理跡
17．戸方山横穴群
21．塔ノ山横穴群

2．飯田二反田遺跡
6．荒瀬横穴群
10．竜王地区条理跡
14．妻垣遺跡
18．小野ノ台古墳
22．上ノ原銅矛出土地

3．且尾遺跡
7．青横穴群
11．宮ノ原遺跡
15．竜王城跡
19．ホキ横穴群
23．佐田城跡

4．上ノ原遺跡
8．恒松地区条理跡
12．下市横穴群
16．西戸方遺跡
20．飯田遺跡

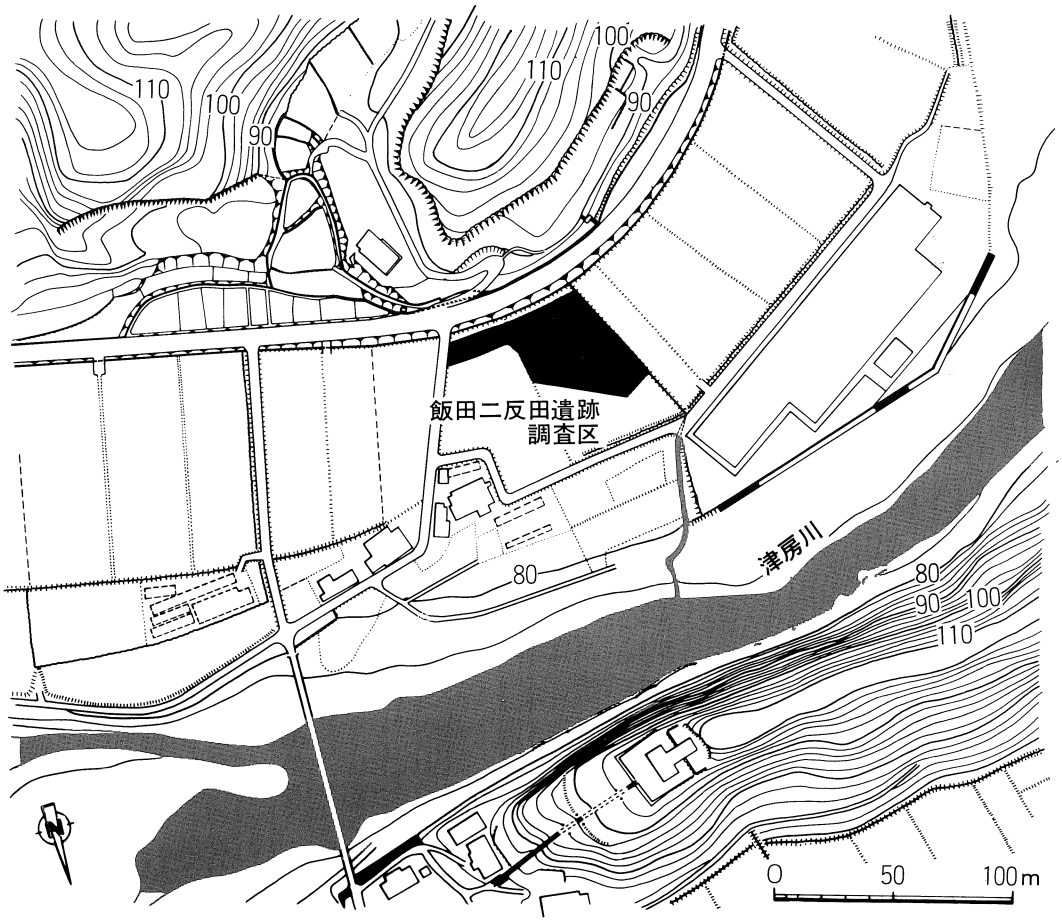
II　飯田二反田遺跡

(1)　遺跡の位置と環境

飯田二反田遺跡の所在する安心院町は、大分県北部に位置する。町内を流れる津房川・深見川などは、由布岳・鶴見山に源を発し、北流して安心院盆地に集合し、その後院内町を流れる恵良川と合流して駅館川となり、県下最大の平野である宇佐平野へと出ていく。

安心院町では、地元の研究者の地道な努力により、町の歴史も解明されつつある。一方、且尾字谷迫・鳥越字切寄の中広銅矛、木裳大平石棺群の三角縁神獣鏡など考古学上興味ある資料も多く出土している。しかし、これらはいずれも出土状況が不明であり安心院町の考古学的成果は、昭和55年の宮ノ原遺跡の調査をはじめ、西戸方遺跡・恒松遺跡など本格的な発掘調査によって大きく進展し、不鮮明な歴史的空白部を埋めることができるようになった。

今回の飯田二反田遺跡の調査も、安心院町では最初の縄文時代遺跡の調査となる。これまで縄文時代の遺跡は皆無に等しく、土器片が上ノ原台地・実盛・鳥越で表採されているに過ぎな



第３図　遺跡周辺地形図

い。今回の調査は当地域における縄文時代後期の理解を深める上でも、非常に注目される。

(2) 調査の概要

飯田二反田遺跡は、駅館川の支流である津房川の右岸の段丘上に立地し、背後には上ノ原台地が広がっている。 今回の調査は、 バイパス建設部分、 またそれに伴い路線変更される県道42号線の拡幅部分を対象地区とした。この地区は、昭和52年に圃場整備が行なわれている。その際、付近から弥生土器が出土しており、今回の調査に遺構確認の期待が持たれた。

11月に重機と人力を併用して試掘に入ったが圃場整備の際の撹乱が激しく、その大半の地区には遺構は認められなかった。しかし、当地区の西端部は、遺存状態が良好で、縄文時代後期の土器が出土したためただちに本調査に入った。調査面積1,500㎡の範囲に、7世紀前半前後に比定される溝状遺構4条、掘立柱建物1棟、縄文時代後期の住居跡6軒及び集石遺構、土坑を検出した。

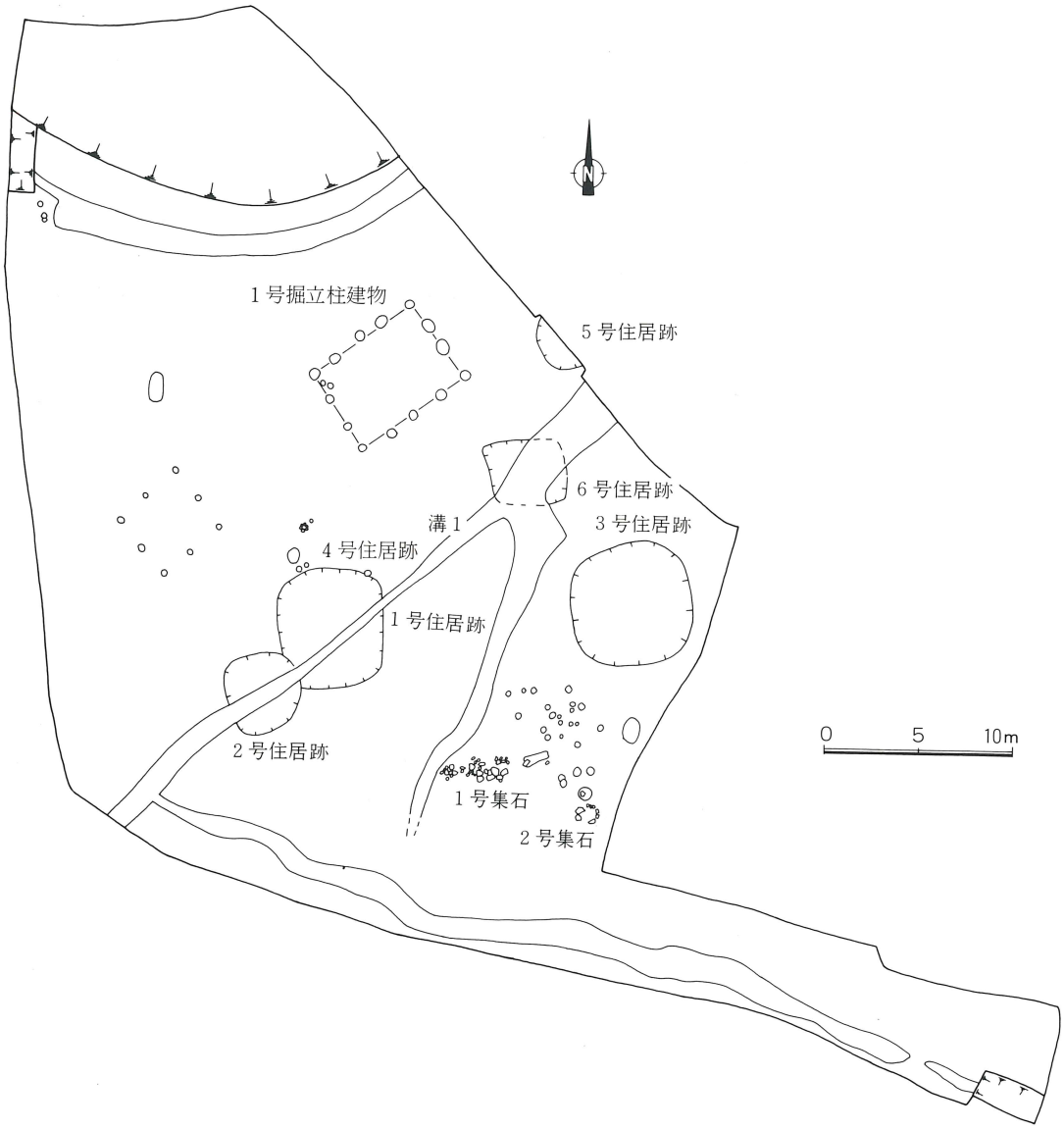
1号住居跡発掘風景

しかしながら、今年は暖冬で、例年ならば雪になるところが、2月、3月と雨が降り、調査区内は水没することがしばしばで、調査が予定ほど進まず、3月現在も継続中である。このため本概報では、住居跡は仮番号を使用している。

現地説明会

No.	平面形	床面・規模	主柱穴	炉	出土遺物	時期
1号住	隅丸方形	6.1×5.4	7本	石囲い炉	土器・石器(扁平打製石斧を含む)	鐘ヶ崎
2号住	不整円形	4.3×4.0	4本	石囲い炉	土器・石器	〃
3号住	——	——	——	——	土器・石器(扁平打製石斧を含む)	北久根山
4号住	不明	不明	——	石囲い炉	土器(少量)	——
5号住	円形	3.5+α ×1.3+α	不明	不明	土器・石器	北久根山
6号住	方形	3.2×4.0	4本	焼土	土器・石器	小池原上層

第1表　飯田二反田遺跡縄文後期住居跡一覧表



第4図　飯田二反田遺跡・遺構配置図

６号住居跡

６号住居跡は、東西長4.0m、南北長3.2m、深さ0.3mを測る方形のものである。中央部は、１号溝により削平されているが、床面直上は一部残っている。中央やや西寄りに焼土が認められ、住居跡に伴う柱穴も検出された。

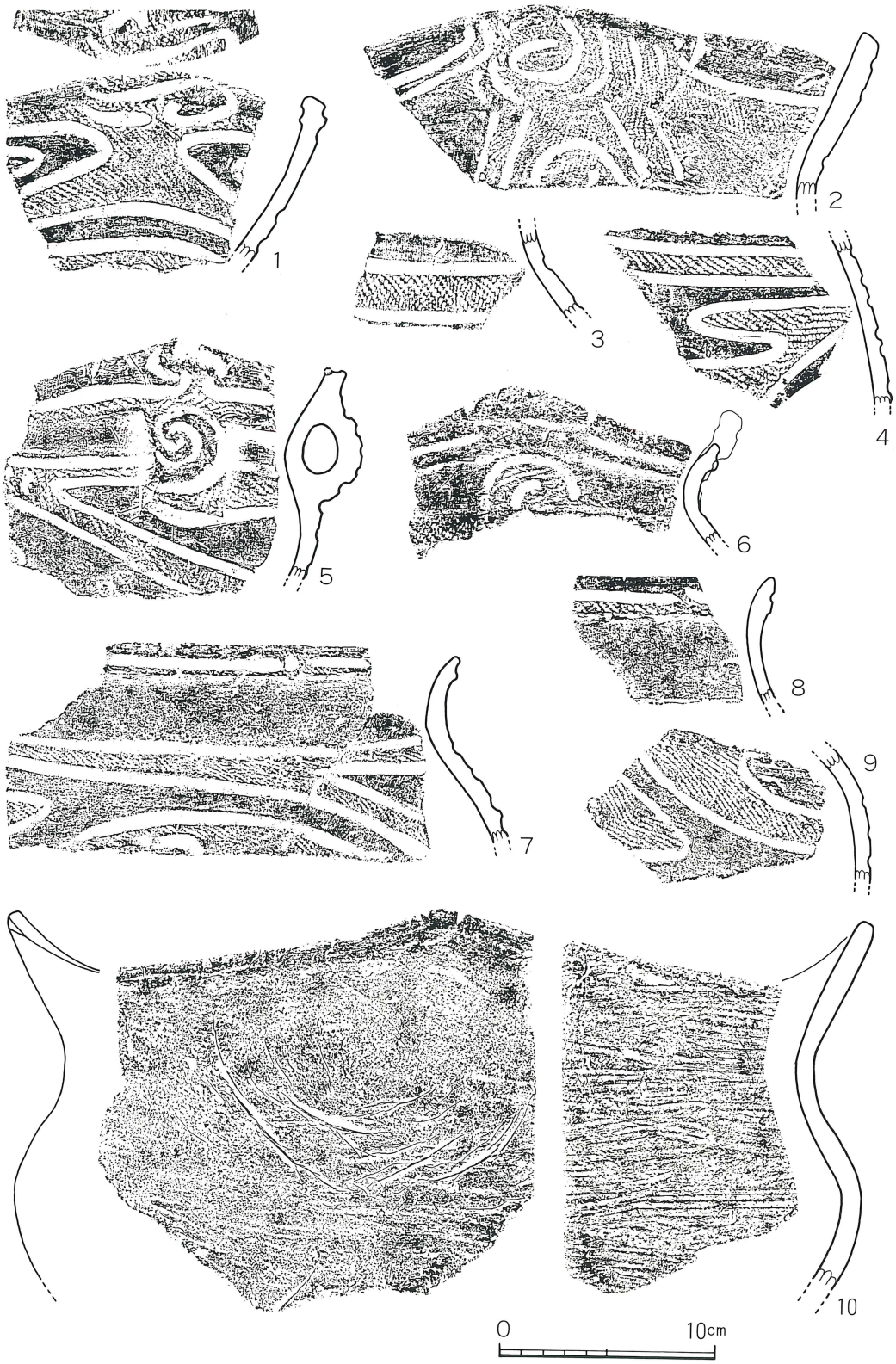
焼土の東側に、偏平な石を立てたものがある。同様のものが、１号住居跡・４号住居跡でもみられ、この立石の住居跡内での機能、とりわけ炉との関係が問題となってくる。

出土遺物は土器片300点、石皿、石鏃などがある。土器は小池原上層式が主体。(1)～(9)は磨消縄文を施すもので、(7)は推定口径34.4cmを測る。(10)は無文鉢。頸部で屈曲して口縁部が外反する。推定口径は38cm。(11)は有文深鉢。頸部が屈曲し、口縁部は短く内湾ぎみに立ちあがる。胴は上部で張り、器面は厚く、底部はやや上げ底状になる。内外面とも条痕文を施こし、その上に幅広沈線で文様を描く。渦巻文様は簡略化されている。

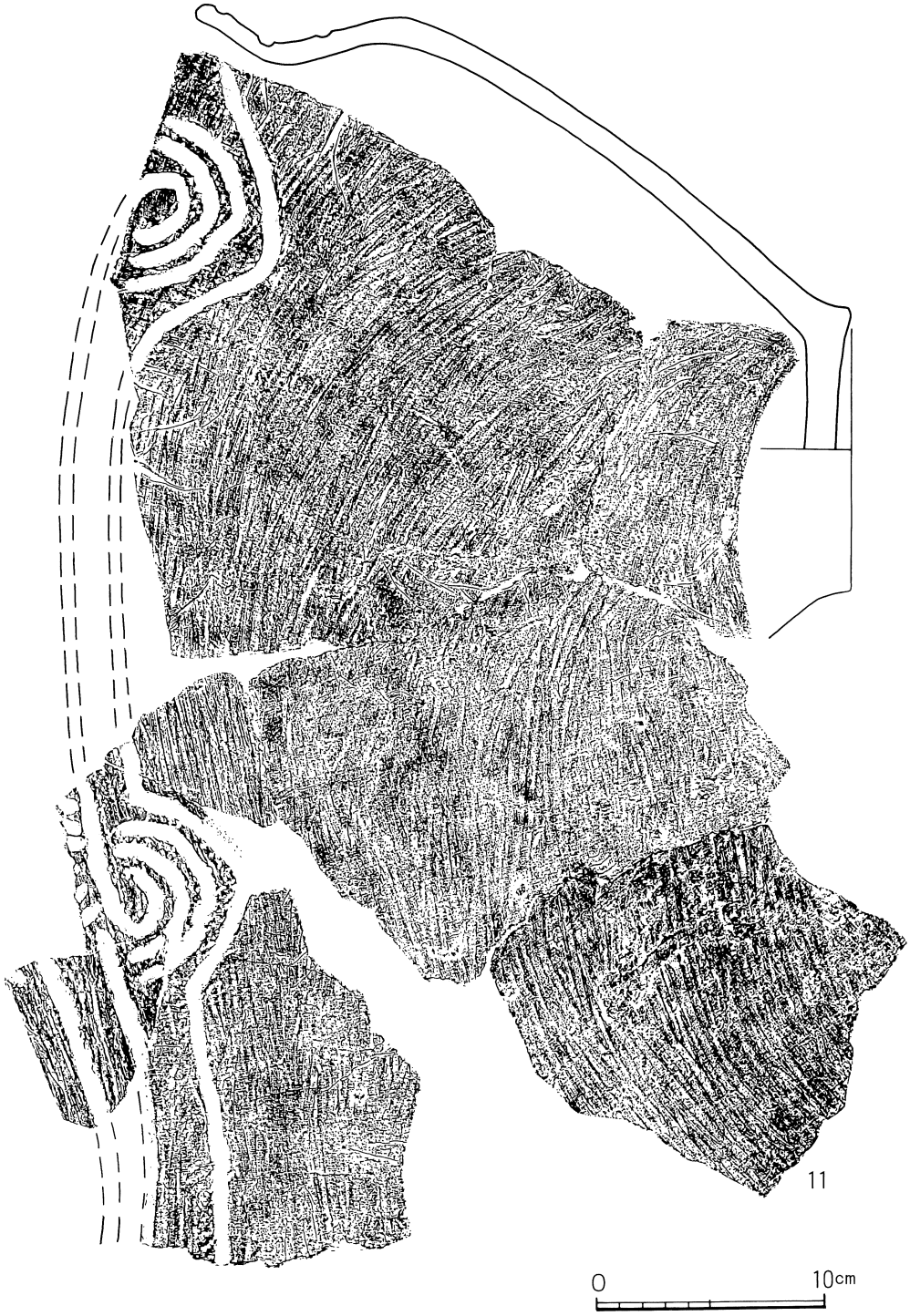
６号住居跡（東より）

６号住居跡 遺物出土状況

４号住居跡の石囲い炉と立石



第5図　6号住居跡 出土土器 (1)

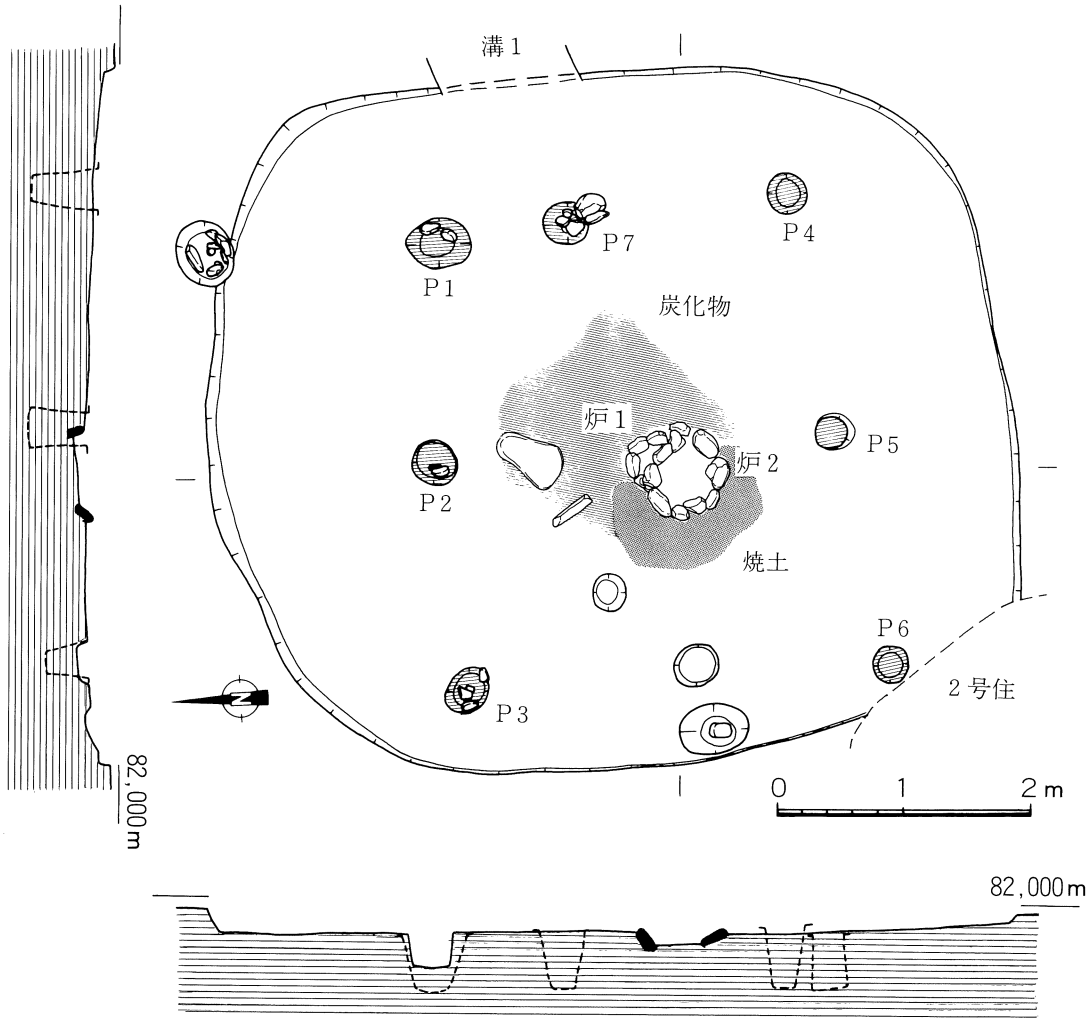


第6図　6号住居跡 出土土器 (2)

1号住居跡

1号住居跡は、調査区の中央にて検出され2号住居跡と切り合っている。住居の形態は、東西長5.4m、南北長6.1m、深さ0.2mを測る隅丸方形のものである。中央やや南西部には石囲い炉が認められ、その西側に焼土、東側には多量の炭化物がある。住居跡に伴う柱穴も7本検出された。P1－P3の芯芯距離は350㎝、P1－P4の芯芯距離は280㎝、P3－P6の芯芯距離は330cm、P4－P6の芯芯距離は380cmを測る。P1は上端直径45cm、底径28cm、深さ50cmを測る。P2は同36cm、30cm、30cm、P3は同35cm、25cm、40cm、P4は同32cm、20cm、48cm、P5は同26cm、30cm、48cm、P6は同28cm、20cm、34cm、P7は同36cm、24cm、45cmを測る。

石囲い炉は、炉2が炉1を切って作られている。炉1は20㎝大の偏平な河原石を花弁状に立てている。推定径50㎝×50㎝。炉2は、炉1よりも若干大きめの河原石（20㎝大～50㎝大）を円形（60cm×70cm）に組んでいる。炉床は40cm×45cmの素掘りである。



第7図　1号住居跡 実測図

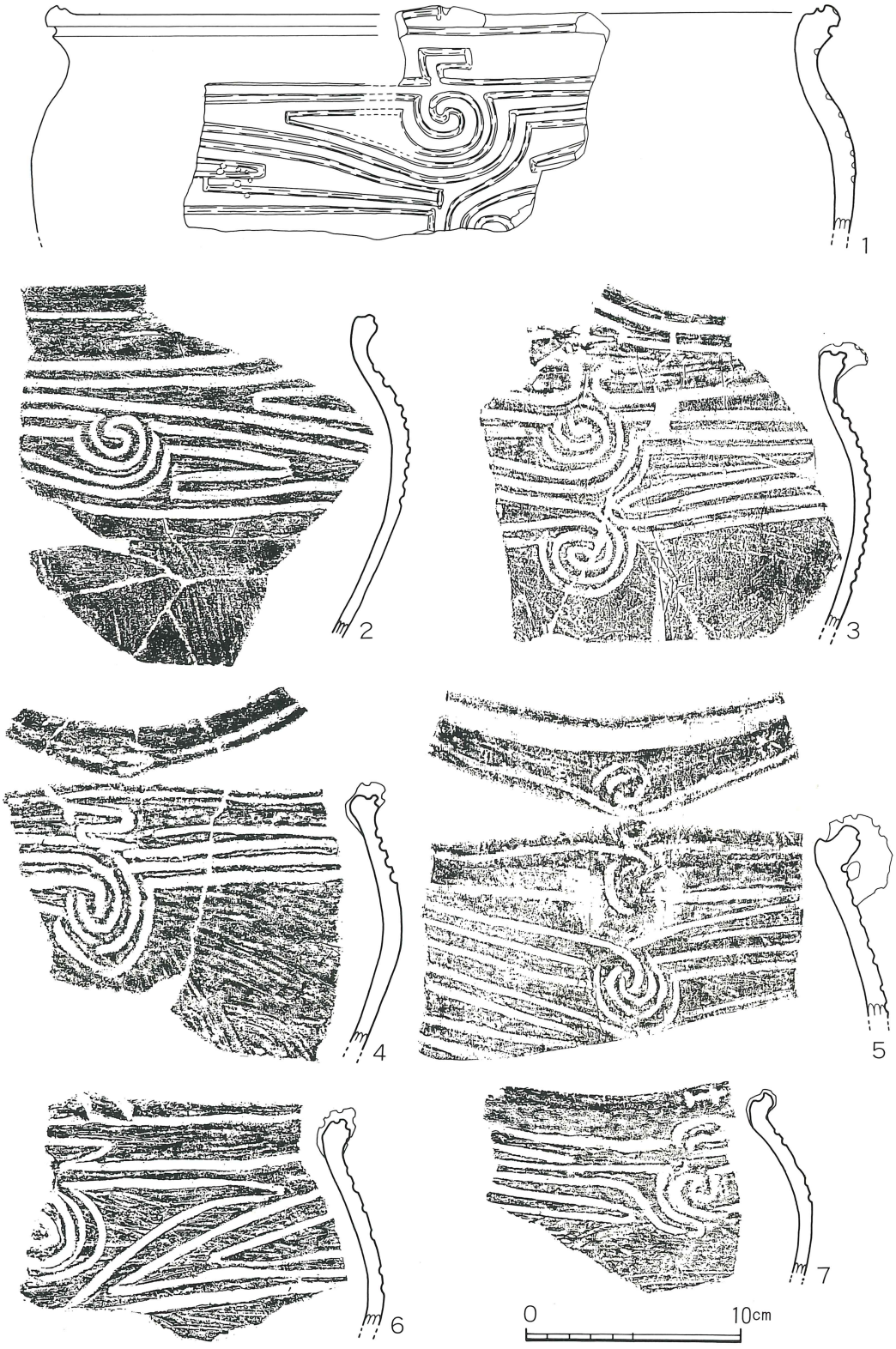
出土遺物は、3,000点以上におよぶ土器片、石皿、磨石、石鏃、打製石斧、石錘などの石器類の他、獣骨片がある。

土器は、縄文後期鐘ヶ崎式に比定される。(1)～(18)は鉢形土器。のうち(1)～(13)は沈線文、(14)～(17)は磨消縄文を施す。沈線文は(1)(2)のように入組文を丁寧に描いたものもあるが、大部分は簡略化されたものである。(18)は口縁部と胴部上半に縄文を施した鉢形土器で推定口径32cm。(19)～(22)は小形土器。(19)は短頸土器。胴部上半に細い沈線文を施す。(20)は対角線上に1対の把手を持ち、口唇部から底部まで全面に沈線文を施す。内面も丁寧に磨かれている。器高5.7cm。口径約9cm。1/3を欠損する。

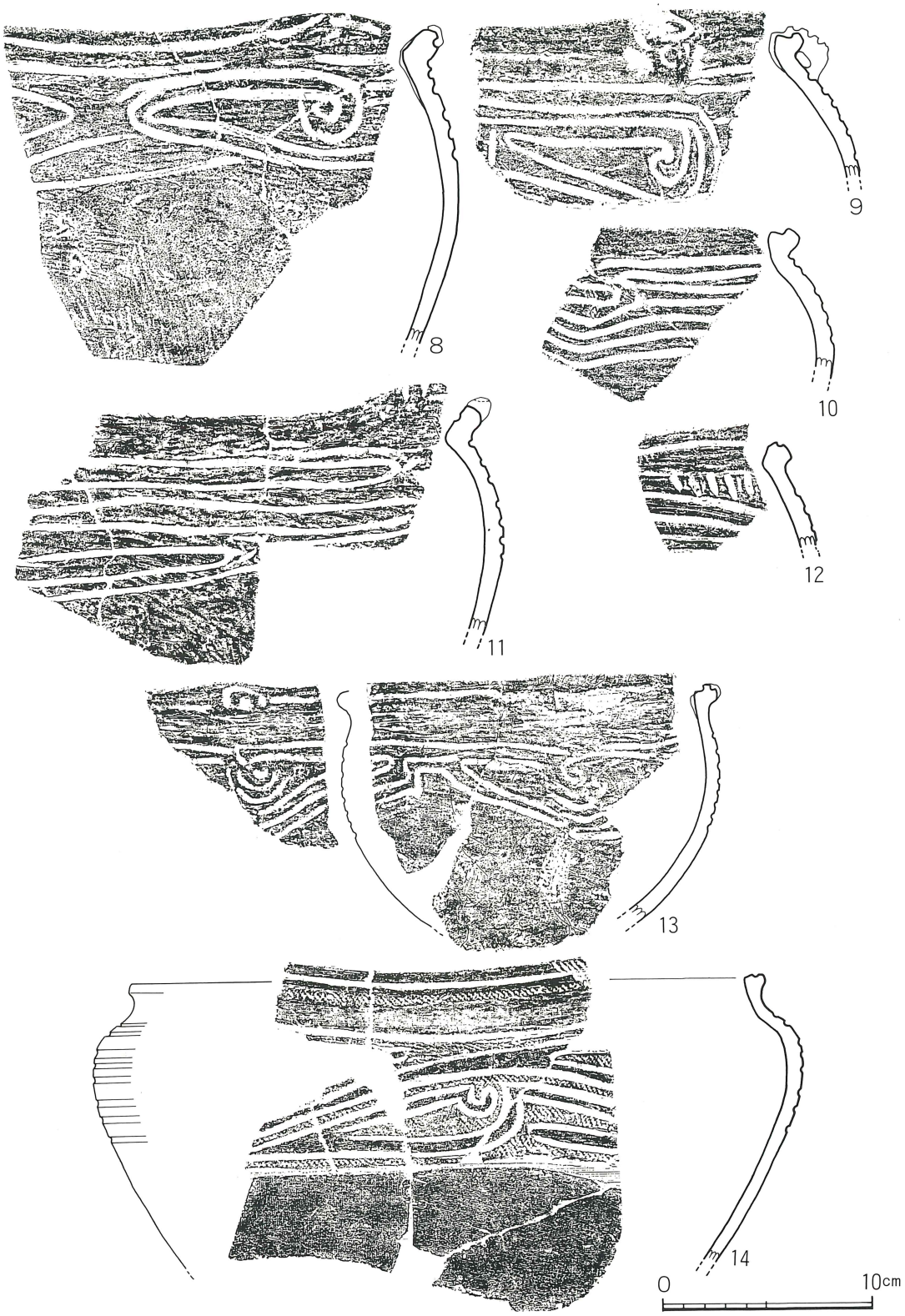
1号住居跡 炉跡付近（西より）

1号住居跡　遺物出土状況

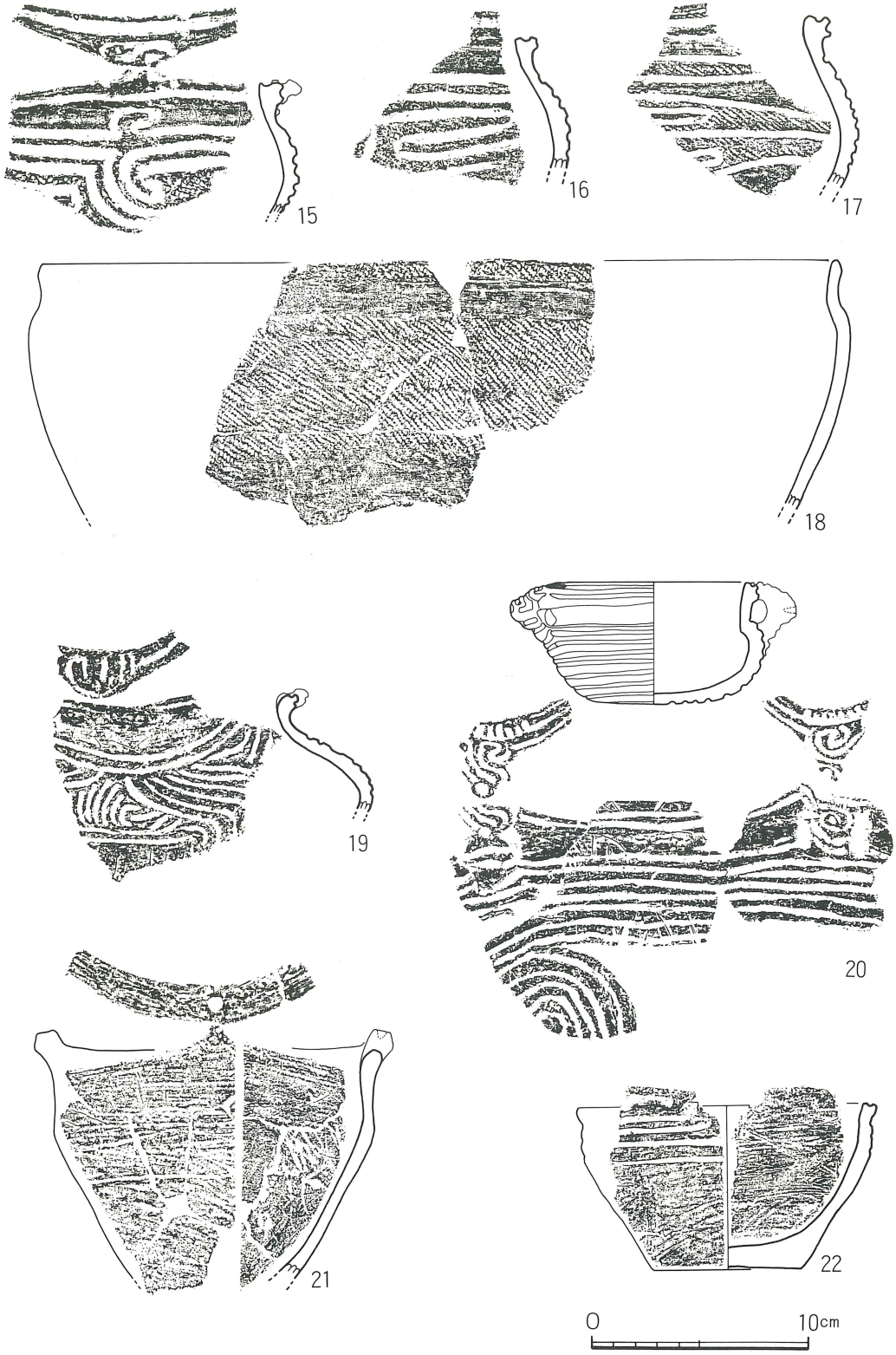
1号住居跡　遺物出土状況



第８図　１号住居跡 出土土器 (1)



第９図　１号住居跡 出土土器 (2)



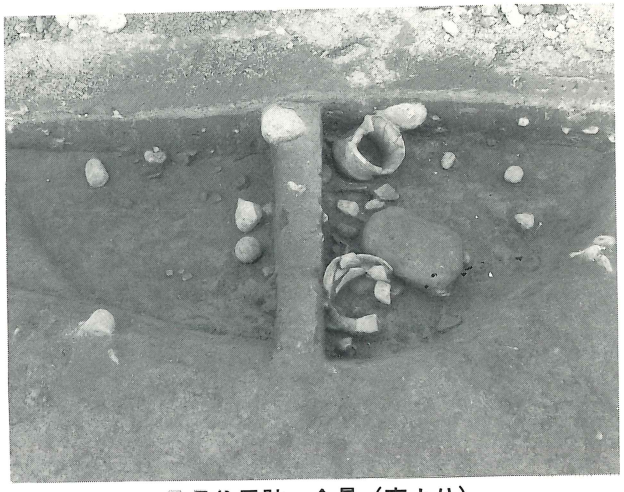
第10図　1号住居跡 出土土器 (3)

５号住居跡

５号住居跡は、調査区の北端にて検出された。遺構は、東西長3.5m＋α、南北長 1.3m＋α、深さ 0.3 m＋α を測る円形のものである。北 2/3 は調査区外へ伸びるため、石囲い炉、柱穴とも不明である。

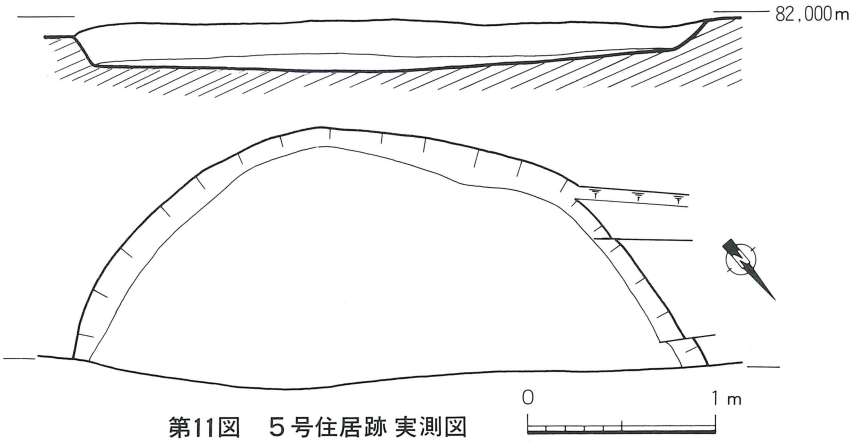
出土遺物は、土器約 200 点、石皿、磨石などである。土器は、北久根山式土器が主体。

(1)は、口縁部に文様体を持ち、縦方向への粘土紐の貼り付けが四方にある。そこには矢羽状文様が描かれている。頸部は無文で胴上半にＲＬの縄文を施す。(4)は注口土器である。器形は全体に丸身をもつが胴部 1/2、口縁部、注口部を欠く為、細部の形式は不明。胴部上半に巻貝による凝似縄文、沈線文を施こす。(3)も(4)と同様に、口縁文様体に巻貝による凝似縄文が描かれる。推定口径24cm。

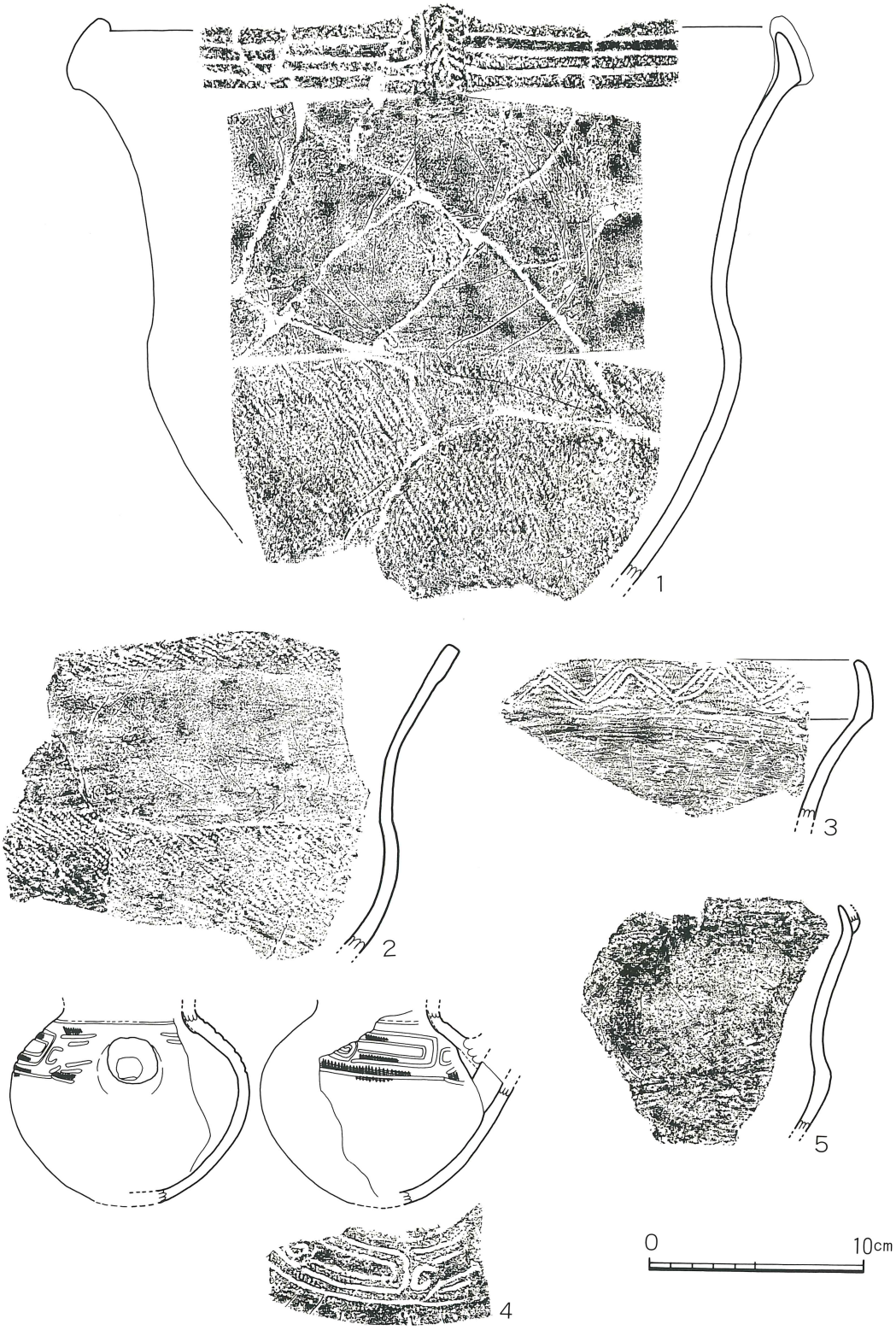


５号住居跡　全景（南より）

５号住居跡　遺物出土状況（西より）



第11図　５号住居跡 実測図



第12図　5号住居跡 出土土器

石　器

ここでは、縄文時代後期の住居跡に伴なう石器を上げている。石器の種類は、礫を素材として使用した礫石器と剝片を加工して作られた剝片石器がある。

礫石器としては、石皿、磨石、磨製石斧、礫石錘などがある。

石皿は、中央部がレンズ状に凹み周辺にははっきりとした稜線もみられる。

磨石は、両面共に使用されており、横断面が長方形を呈するほどの減り方を示しており、使用頻度の著しさがうかがえる。磨製石斧は、蛇紋岩、頁岩製のものである。

礫石錘は、河原石を打ち欠いて作った打欠石錘が大半で、大きさ４～５㎝、重さ20～80ｇほどのものが多い。

その他、敲石、砥石については未整理のため、これから検出される可能性もある。

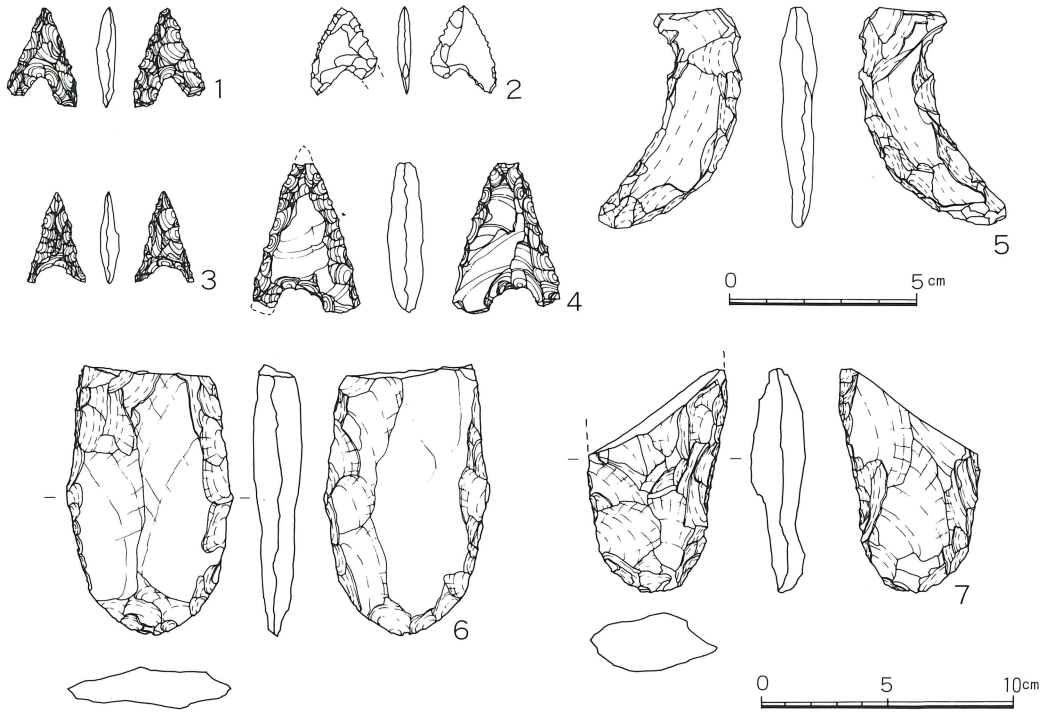
剝片石器としては、石鏃、石匙、扁平打製石斧などがある。

石鏃は、姫島産の黒曜石が大半を占めており他に安山岩、チャート、黒曜石等がある。また石核、剝片の出土比もほぼ同じ数値を示している。

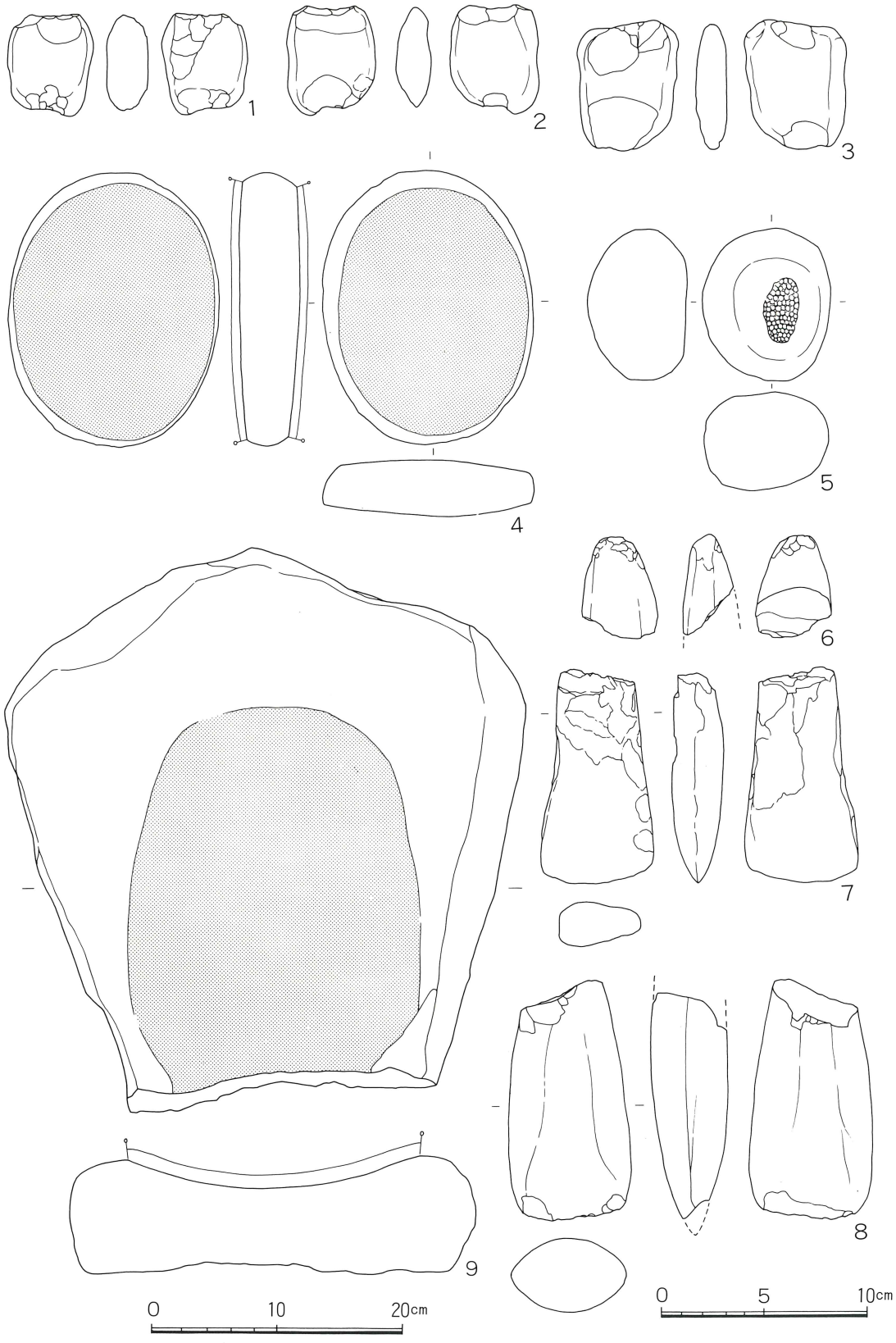
石匙は、安山岩製である。扁平打製石斧は、安山岩、片岩などがある。

以上の石器の中で礫石錘の点数が多く検出されていることが特徴である。また住居跡の中からは焼けた石が多数検出された。

今後の土壌分析によって、どのような食物を採集し、どんな自然環境であったかが解明されることで、これらの石器がより意味を持つであろう。



第13図　飯田二反田遺跡 出土石器　(1)（1～5は1／2　6～7は1／3）



第14図　飯田二反田遺跡 出土石器　(2)（1～8は1／3　9は1／5）

Ⅲ　ま　と　め

今年度より本格的に開始した宇佐別府道路の発掘調査は、路線が山間部を走り、しかも台地上を避け、縁辺部の斜面を巡っているため、遺跡の規模や重要性については、強く期待されるものではなかった。しかし、安心院町飯田二反田遺跡で、縄文時代後期の集落跡が見つかるなど、当初の予想を上回る成果が得られた。

飯田二反田遺跡は調査が継続中であるが、現在までに確認されている遺構の時期と種別は、縄文時代後期住居跡・土坑・集石遺構と7世紀前半頃に比定される溝状遺構、・掘立柱建物である。このうち縄文時代後期の住居跡は6軒確認された。

住居跡について言えば、1号住居跡は、5.4m×5.8mの隅丸方形プランで、中央に石囲い炉を持ち、その回りに焼土と炭化物があり、しかも、柱穴も7本確認されるという具合に完全な形を残しており、当地域における住居形態を理解する上で貴重は資料となろう。住居内では、6号住居跡などにみられる立石とそれに隣接する炉との関係を検討していきたい。

また、住居のプランは、ここでは円形・方形の混在であるが、6号住居跡（小池原上層式）が方形、1号住居跡（鐘ヶ崎式）が隅丸方形、5号住居跡（北久根山式）が円形プランであることから、方形から円形への流れが当地域においてみられる。

その他、住居跡の東南部には、集石遺構が2基検出されている。1基は人頭大の礫を円形に配したもの、もう1基は配列に規則性はみられないが、平石をある程度高さをそろえて設置したものである。これらの集石遺構の集落内における住居との位置関係及び機能について、今後検討していきたい。

土器については、1号住居跡だけで3,000点を越えるほど多量に出土しており、さらに、住居跡間に若干の時期差がみられることから、土器編年を考える上では貴重な遺跡であると考える。

最近、豊前地方においては、福岡県の中村石丸遺跡・山崎石町遺跡、大分県の佐知遺跡・尾畑遺跡等縄文時代後期の住居跡が検出されている。飯田二反田遺跡もその一つとして資料を提供し得る遺跡であろう。

いずれにせよ、今回の調査により得た多くの資料は、空白の多い当地域の縄文時代後期の社会について埋めることが十分に可能であると言えよう。また、調査対象区は、本遺跡の限られた地区であり、集落が周辺に広がっていくことも十分予想される。したがって今後その確認が望まれる。

本年度の宇佐別府道路発掘調査にあたり、作業員として次の方々の協力を得た。

安部かず子・安部しげ子・安倍十三生・安部トヨコ・安部好行・江口シゲ子・江口トシ子・高窪静子・出口一子・出口ヨシコ・中島スエ子・西谷重子・宮川ハルノ・宮本絹子（院内町）

安倍トヨ子・安部二美子・安倍マサ子・池永マツ子・石川清子・石川静子・石川スエ子・石川ツネ子・石川日出子・石川由美子・石田京子・石山文子・江藤洋子・大石スミ子・大隈イソヨ・大隈和枝・大隈絹枝・岡嶋信代・小代末子・小野サダ子・加藤ヨシコ・河野勝子・河野恵子・河野美重子・久保ヤス子・隈田シゲ子・後藤栄子・斎藤昭子・佐田サメ子・佐藤千代美・佐藤三子・塚崎妙子・坪井昇子・時枝正子・時枝ミサ子・永塚アイ子・長野和代・飯田克巳・飯田　京・久恒ヨシ・松木留美子・宮川輝子・柳瀬英子（安心院町）

飯田二反田遺跡

一般国道10号宇佐別府道路
建設に伴う発掘調査概報Ⅰ

1989年3月31日

発　行　大分県教育委員会
印　刷　日の丸印刷株式会社